

「小羊」

ヨハネの福音書 1:29～42

1. 小羊

1:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

神の小羊。なぜ世の罪を取り除くのが小羊でなければならないのでしょうか。ヘブル語からその答えを導き出してみたいと思います。セ(נֶשֶׁ)という非常に短い言葉が小羊のそれです。



スィーン(נֶשֶׁ)…歯を象った象形文字です。「形」あるものという意味もあり、同じ文字であるシーン(שֵׁן)は「神の形」を指し、一方このスィーン(נֶשֶׁ)は「人間の形」を表していると考えられています。

ヘー(נ)…窓を象った象形文字です。そこから「見る」という意味があり、また換気口としての意味から呼吸する、つまり「生きる」という意味があります。

これらの意味を合わせると、セには「生きている人間」また「この人を見よ」という意味があることが解ります。イエシュアはまさに「生きている人」の形をとってこの地上に来られ、「この人を見よ」、イエシュアを見れば神様がどんな方であるかが解る、神様の計画がどんなものであるかが解る、だからイエシュアを見なさいという意味がこの小羊、セには込められているのです。因みにこのセが聖書で初めて登場する箇所が、創世記でアブラハムがイサクをささげようとする場面です。

イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」すると彼は、「何だ。イサク」と答えた。イサクは尋ねた。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」アブラハムは答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。(創世記 22:7～8)

この出来事で神様から与えられた試練にアブラハム、そしてイサクは見事に合格します。そして神様はアブラハムを大いに祝福してこう言われるのです。

「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

(創世記 22:16～18)

つまり小羊、セであるイエシュアは、神様がアブラハムと交わした約束、契約に関わる、それを成就するための存在であるということです。この契約は、今日もまだ成就されてはいません。これはやがて来る神の「御国」の完成を指し示す言葉です。このようにセは、神様がアブラハムと交わした約束、契約を想起させるのです。そしてそれがイエシュアによって成就されることが語られているのです。

2. 水

1:30 私が『私のあとから来る人がある。その方は私にまさる方である。私より先におられたからだ』と言ったのは、この方のことです。

1:31 私もこの方を知りませんでした。しかし、この方がイスラエルに明らかにされるために、私は来て、水でバプテスマを授けているのです。」

次に、なぜヨハネは水でバプテスマを授けているのかを考えてみたいと思います。ヨハネが言うように、イエシュアを「イスラエルに明らかにする」こと、それが水のバプテスマとどんなつながりがあるのでしょうか。ヨハネはイエシュアについて「先におられた方」と表現しています。これはヨハネよりもイエシュアの方が年上という意味ではありません。イエシュアが人間としてお生まれになるのは、ヨハネが生まれた後です。ですからこの「先におられた」とは、創世記 1:1、そしてこのヨハネの福音書 1:1 が記す「初めに」おられた方という意味です。

初めに、神が天と地を創造した。(創世記 1:1)

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。(ヨハネ 1:1)

神様はイエシュアによって天と地にあるすべてのものを創造されました。しかしそれ以前に存在していたものがあります。

初めに、神が天と地を創造した。地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。(創世記 1:1~3)

それは水です。水は天と地が創造される以前から存在していたことが解ります。つまりヨハネは、イエシュアが天地創造の前から「初め」から存在していたことを水にたとえているのです。

3. バプテスマ

次にバプテスマについてですが、「洗礼」または「清め」のような儀式的なイメージの強い言葉ですが、本来は「浸す、沈める」という意味しかありません。しかしヘブル語ではターヴァル(טָבַל)と言い、意味そのものとしてはほとんど同じなのですが、この言葉が聖書で初めて用いられた出来事は、「清め」などとは程遠いものでした。

彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎをほふって、その血に、その長服を浸した。(創世記 37:31)

このように、浸したのは水ではなく「血」です。他にも儀式的な意味でターヴァルは使われるのですが、実はそのほとんどが「血に浸す」という内容です。

ヒソブの一束を取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血をかもいと二本の門柱につけなさい。朝まで、だれも家の戸口から外に出てはならない。(出エジプト 12:22)

困みにこれもターヴァルです。

あなたは私を墓の穴に突き落とし、私の着物は私を忌みきらいます。(ヨブ 9:31)

つまりターヴァルには、沐浴、洗い清めるというよりもむしろ「死ぬ、殺す」ような概念を持った言葉であることが解ります。そうなりますと私たちはすぐイエシュアが十字架にかけられて血を流し、殺されることを連想してしまいます。もちろん間違いではありませんが、ヨハネはこう言っています。「世の罪を取り除く」と。イエシュアを信じる者は、確かに罪が取り除かれ救われます。しかし信じない者の罪は残ります。イエシュアは「世の罪」つまりこの世に存在するすべての罪を取り除く、つまりすべての「罪を滅ぼす」ために来られるのです。ですからこのターヴァルはイエシュアの十字架の死という意味ではなく、イエシュアの再臨によって地上の罪が一掃されることを意味していると考えられます。

このように、水のバプテスマには、「初めからおられた方」イエシュアが創造主すなわち神であって、被造物すなわち造られたものではないということ、そしてバプテスマ、すなわちターヴァルには「世の罪を滅ぼす方」という意味がこめられていると考えられます。

4. 聖霊のバプテスマ

1:32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。

1:33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを受けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上の下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを受ける方である。』

1:34 私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」

では水のバプテスマに対して、この聖霊のバプテスマ「聖霊のターヴァル」とは何でしょうか。ヘブル語的視点から見ますと



テット(ט)…蛇を象った象形文字です。賢さ、知恵(知識)を意味します。

ベート(ב)…家を象った象形文字です。神の家である「御国」を直接的に指し示す文字です。

ラーメド(ל)…杖を象った象形文字です。学ぶ、習う、訓練すると

という意味があります。

これらの意味を組み合わせると「御国を学ぶ知恵」となり、私たちがどっぷりと浸る、ターヴァルしなければ
ならないのは、水でも血でもなく、「御国について学ぶ」ことであることが解ります。それこそが、今を生きる
私たちに必要な「知恵」なのです。そしてそれを助けるのが聖霊ルーアハ(𐤆𐤊𐤁)です。



レーシュ(ר)…頭を象った象形文字です。かしら、思考を意味します。
ヴァーヴ(ו)…釘を象った象形文字です。上から下る、降りて来るとい
う意味があります。
ヘット(ח)…柵を象った象形文字です。境界、隔たりという意味から、
限りある人生を意味しています。

これらの意味を組み合わせると「頭に降りるものによって生きる生き方」となります。つまりこれは上からす
なわち神様から与えられる思考が頭に入り、それによって生きる生き方、つまり「神様の御心になつた人生」
という意味であると考えられます。

つまり聖霊のバプテスマ、ルーアハのターヴァルとは「御国」を思う「思い」が与えられ、「御国」について
学ぶ、探究する中でさらにそれが与えられ、「御国」を待ち望む、切望する生き方を意味すると考えられます。

5. 泊まる

1:35 その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、

1:36 イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊」と言った。

1:37 ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。

1:38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」
彼らは言った。「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊りですか。」

イエシュアの「何を求めるのか」という質問に対して「どこにお泊りですか」という、一見話が噛み合っていない
ような、的外れのようなやり取りにも見えますが、ふたりの弟子が「どこにお泊りですか」と言っている
「泊まる」で使われているヘブル語は、モーシャーフ(מושב)で「着席、座席、住むこと、住む所」という
意味があり、宿やホテルにちょっと一泊という意味ではなく、むしろ「定住」「住み着くこと」を意味する言
葉です。ここにはイエシュアの住まう所、イエシュアの着座される御座を求める者の姿の、その型が表されて
います。イエシュアの住まいは「御国」です。これは「御国」を求める者の姿が表されているのです。

1:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らについて行って、イエ
スの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。

「イエシュアの泊まっておられる所」ですから、これも「イエシュアの住まう所」すなわち「御国」です。彼
らはイエシュアについて行ってそれを「知った」とあります。そして「イエシュアといっしょにいた」と。こ
のように、一見何気ない、ありふれたごく普通の描写の中にも、「御国」が表されています。そして時は 10
時頃となっていますが、私たちの時間で大体午後 4 時くらいだと思われま。ユダヤの一日は夕方から始ま

ります。ですからちょうどこの時間帯は日付が変わる時、つまり一日の終り、今日という日が「完了、完成」する時です。御国を求める者たちとイエシュアがいっしょに住まう、これが神様の計画の「完了、完成」です。

6. シモン

1:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。

1:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った」と言った。

1:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします。」

ここではシモンという人物に焦点を当てて考えてみたいと思います。旧約聖書ではシメオンと表記されています。ヘブル語ではシムオン(שמעון)と表記し、「聞く」という意味の言葉シャーマ(שמע)が語源になっています。

彼女はまたみごもって、男の子を産み、「主は私がきらわれているのを聞かれて、この子をも私に授けてくださった」と言って、その子をシメオンと名づけた。(創世記 29:33)

神様は、夫ヤコブに愛されない妻レアの嘆きを聞かれてシメオンを与えました。このヤコブの次男シメオンは狡猾で残忍な人物のように聖書では描かれています。結果シメオンは、弟のレビと共に父ヤコブに呪われます。ヤコブの息子たちはみなイスラエルの 12 部族の祖となっていきますが、シメオンの子孫、つまりシメオン族は 12 部族の中で結果的に最も人数の少ない部族になり、約束の地カナンにおける相続地も、ユダ族の相続地の中に宛がわれ、ユダ族の助けを得なければ存在できないほどに弱くなってしまいます。

のろわれよ。彼らの激しい怒りと、彼らのはなはだしい憤りとは。私は彼らをヤコブの中で分け、イスラエルの中に散らそう。(創世記 49:7)

そしてシメオン族はのろわれ、「散らされた民」となり、部族としての存在が失われます。このように、シメオンという名には、散らされた民、失われた民という意味があるのです。

そんないわくつきの名前を持つシモンが、兄弟アンデレによってイエシュアのもとに連れて来られます。ここに失われた者を探し、集めるイエシュアによる神様の計画を指し示す型が描かれています。

人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」(ルカ 19:10)

7. ケパ

このシモンに、イエシュアは新しい名前、「岩」を意味するケーフ(קֵיף)の派生語ケパ(קֵפָא)を与えます。注意しなければならないのは、アブラムからアブラハム、ヤコブからイスラエルのように、もう古い名前では呼ばない、つまり改名しなさいと言われたのではないということです。シモン、シムオンはシャーマ「聞く」神様が私たちの祈りに耳を傾けてくださるといすばらしいメッセージを持った名前です。その名を否定することなく、付け足す形でケパという名前を与えたということです。ケパの語源であるケーフは単語としては「岩」という意味ですが、ヘブル文字で分けて見てみますと



カフ(ק)…手のひらを象った象形文字です。受け取る、捕える、適用する、という意味があります。

ペー(פ)…口を象った象形文字です。言葉、食べる、分け前、という意味があります。

つまりどちらも「受ける、得る」という意味があることが解ります。つまりシモンにケパという新しい名前が与えられるという意味は、「失われた民」の嘆きを「聞かれた」神様が、イエシュアのもとに引き寄せ、「分け前」相続地である「御国」を受け継がせる、というメッセージが込められているということなのです。またこの新しい名前が与えられるという出来事自体も、御国の完成を預言する一つの型です。

そのとき、国々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。あなたは、主の口が名づける新しい名で呼ばれよう。(イザヤ 62:2)

イエシュアが、失われた人を捜して救う目的は、神様がその人のために用意された「分け前」相続財産である「御国」受け継がせるためなのです。イエシュアはまさにそのことの為に来られた方であることが、これらの何気ない話の流れの中に秘められた神様の計画「御国の福音」だと考えられます。